

# 「障がい」者表記の効果に関する検討

0707073

佐々木 茜

## 【目的】

「障害者」をどう表記・表現するかの問題は、以前から議論の対象となってきた。その中で、近年国や地方公共団体を始め「障害者」を「障がい者」と表記する取り組みが始まっている。「障がい者」表記は、「害」という字をひらがなで表記することによって、「障害者」という言葉に対する差別や偏見を解消しようとする見方(熊田,2002;安田,2005)である。一方で、漢字かひらがなかという議論事態を、無意味あるいは不快であるとする意見や、表記の問題は障害者施策において本質的なことではないとする議論もある。この「障がい者」表記の効果は、未だ明らかになっていない。本研究では、栗田・楠見(2010)の先行研究をもとに、「障がい者」表記が障害者に対するイメージや態度に及ぼす影響を、接触経験・知識との関連から検討する。

## 【方法】

被験者は大学生 423 名(男性 125 名,女性 295 名,無記名 3 名), 平均年齢 19.74 歳(SD=2.18)であった。イメージの測定には栗田・楠見(2010)で用いられた身体障害者イメージ尺度を参考に、単極性の障害者イメージ尺度を作成した(22 項目)。態度の測定には河内(2004;2006)の当惑尺度(8 項目,例:障害者には気軽に声かけられない), 及び交友関係尺度(9 項目,例:障害者の学生とレストランで食事をする場合),自己主張尺度(9 項目,例:障害者の学生が自分でできると思われるので手伝いを断る場合)を使用した。接触経験は、「実習やボランティア活動等で直接的に頻繁に関わった(直接多)」「実習やボランティア活動等で直接的に数回関わった(直接少)」「講義や新聞,テレビ等で見たり聴いたりしたことがある程度(間接)」「全く関わったことがない(経験無)」の 4 件法で尋ねた。知識については、豊村(2005)及び生川(1995)で用いられた知識項目から 9 項目を使用した。質問紙は、「障害者」を漢字表記(障害者)としたものと、ひらがな表記(障がい者)した 2 種類を作成し、ランダムに配布した。

## 【結果と考察】

障害者のイメージ構造を明らかにするために、因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った結果、「尊敬」「社会的不利」「同情」「生活上危険」の 4 因子を抽出した。各因子及び態度尺度の得点について、表記(漢字・ひらがな), 接触経験(直接多・直接少・間接), 知識(高・低)によって差が見られるかを検討するために、3 要因被験者間分散分析を行った。

その結果、「尊敬」因子では漢字表記の方がひらがな表記よりも尊敬イメージが高かった( $F(1,398)=9.02,p<.01$ )。一方「生活上危険」因子では、ひらがな表記群のほうが漢字表記群よりも生活上危険イメージが高かった( $F(1,404)=5.13,p<.01$ )。また、「尊敬」「社会的不利」「生活上危険」因子において知識と表記の交互作用が見られ、下位検定の結果、ひらがな表記群における知識群別の平均値に有意な結果が見られたが、その差は有意ではなかった。「社会的不利」因子では、知識高群における表記群別の平均値に有意差が見られ、知識高群においてひらがな表記群の方が漢字表記群よりも社会的不利イメージが高かった( $F(3,391)=3.43,p<.05$ )。その他の因子については、表記の影響は見られなかった。

態度尺度については、自己主張尺度においてひらがな表記群の方が漢字表記群よりも自己主張尺度の得点が高くなることがわかった( $F(1,387)=4.28,p<.05$ )。その他の態度尺度には表記の影響は見られなかった。

以上の結果より、ひらがな表記は、尊敬イメージに対してネガティブな影響を、生活上危険因子及び自己主張尺度に対してはポジティブな影響を与えることが明らかになった。また、知識との関連から、尊敬と社会的不利イメージにおいて知識の高い群にはネガティブな、知識の低い群にはポジティブな影響を与える可能性が見出された。

(指導教員 豊村 和真 教授)